

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第47号 2006年12月1日(金)

発行：歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)



▲台風14号で水損したアルバム(於宮崎市富吉地区 2005年9月30日撮影)

目次

巻頭言 各地にひろがる「予防ネット」の動き～山形での防災サミットに参加して～

松下正和・・・2

宮崎歴史資料ネットワークの誕生と今後

若山浩章・・・6

第8回「火垂るの墓を歩く会」

辻川 敦・・・3

◆特集 九州における資料救済活動

有償ボランティアの募集について

史料ネット運営委員会・・・8

福岡県西方沖地震における
史料救出活動

伊藤昭弘・・・4

各地にひろがる「予防ネット」の動き

～山形での防災サミットに参加して～

松下 正和

2006年10月20・21日、山形市にある東北芸術工科大学で行われた、第1回全国文化遺産防災サミット・文化遺産防災フォーラム(同文化財保存修復研究センター)に、史料ネットから奥村弘代表と私が参加してまいりました。私は初日のサミットで「歴史資料ネ



ットワークの地域遺産保全活動」と題して、主に2004年以降に活動をはじめた水損史料の救出・修復について報告を行いました。奥村代表は、翌日のフォーラムにて「大規模自然災害と地域歴史遺産保全～阪神淡路大震災から現在までの歩み」と題して、史料ネットのこれまでの活動を紹介しました。そこでは、地域の核に

なるような文化遺産であれば未指定のものも災害時に保全対象とする内閣府の答申や、震災資料の保全にみられるように、大震災の経験を個人に留まらず社会全体で共有しようとする通念の拡大など新たな動向をふまえて、歴史文化に対する視点をもつ専門家の育成とネットワーク化、歴史関係者のネットワークとリンク可能なリーダーを地域社会の中で養成することの重要性を訴えました。

両日で20をこえる報告は、いずれも興味深く、皆さんにお伝えしたいものばかりですが、印象に残った点を3つだけご紹介したいと思います。

火事を含んだ災害対応のひろがり 報告会では、阪神淡路大震災や福岡県西方地震、新潟県中越地震などの地震による被害や、2004年の連続台風による風水害だけではなく、火災(火事・噴火)からの文化財保全の事例も報告されました。鎮火→現場検証→回収・整理といった火災時の対応の流れや、放水時の水損・熱による固着資料の切断などの火災独自の課題についても知りました。また、噴火時の資料搬出における火山ガスへの対応や緊急避難経路の確保など、文化財の安全だけではなく搬出する方の安全をいかにして確保するののかという点も考えさせられました。

未指定文化財への対応 この報告会では、指定文化財の保全はもちろんのこと、未指定文化財についても保全の対象とすることが共通理解となって議論が進められている点が印象的でした。ただ、指定文化財については行政による保全義務があるこ



とから不十分ながらも人と経費を投入することができるのですが、現実には未指定文化財への対応は後回しにならざるを得ず、さまざまな面で困難を抱えています。行政の担当者としては私有財産に税金を投入して保全するには住民や議会の同意が必要だ、という意見がでました。その点をクリアするためにも、地域住民にとっての身近な文化財の意義について、——これまでの各地の史資料ネットの活動から十分に伝えられていると思うのですが——さらに被災地の住民や行政・研究機関などにアピールする必要を感じました。村の庄屋の史料が、現在ある旧家に伝来することに端的に示されているように、「公」的だったものが「私」の中に残存していくというのが、日本社会における地域歴史遺産の残り方の特質となっています。災害時に保全する地域文化遺産の中に未指定のものも含めるとする内閣府の答申を理論的な根拠に、地域防災計画の中に文化財保全の項目を入れることで、災害時の歴史資料保全活動を復興業務の一環に位置づけるという方法もあるかと思っています。

予防ネットのひろがり これまでの各地の史(資)料ネットは、災害発生後に設立されるものでした。ところが、近年では、災害に遭う前に事前にネットワーク化をはかる動きが各県で見られるようになりました。山形では、このサミット・フォーラムの主催者である東北芸術工科大学を中心に活動が進められていますし、福島ではこの10月に「ふくしま文化遺産保存ネットワーク」(<http://www.history-archives.fks.ed.jp/hozon/index.html>)が結成されました。福島ではメールにより文化遺産の最新情報を配信するそうです。このような文化財防災をめざす「予防ネット」的な活動は、他にも岡山や静岡など各地に広がりつつあります。大規模な災害を経験していない地域において、危機感を常に持ち続けるのは大変なことだと思います。所蔵者の代替わりやコミュニティーの過疎化にともない、歴史資料は災害時のみならず日常的にも滅失の危機にさらされている地区があります。このような地区に出向き、住民とのつながりを大切に歴史資料や景観を含めた、日常の保全活動をおこなうことが、結果として非常時に備えることになるのだと思います。

(まつした まさかず／史料ネット事務局長)

第8回「火垂るの墓を歩く会」

辻 川 敦

第8回目となった今年の「火垂るの墓を歩く会」は、2006年8月6日(日)と8日(火)に実施。第2回、第5回と同じく、香榎園浜コースを歩きました。

両日とも午前9時30分に阪急夙川駅に集まり、小説に登場する喫茶「ラ・パボーニ」跡を訪れたのち夙川公民館へ。ここで実行委員会の正岡茂明代表から、小説およびアニメ「火垂るの墓」の内容や、そこに登場する夙川・香榎園浜の場面について説明を聞き、ビデオを観たのち、夙川沿いに香榎園浜・回生病院へと作品のなかで清太と節子がたどった道のりをたどりました。今回は、事前のマスコミの取り上げが少なかったこともあって、参加者が6日＝37人、8日＝31人と、例年より少なめでしたが、保護者とともに参加する子どもたちも多く見られ、内容的にも例年同様好評でした。(つじかわ あつし／尼崎市立地域研究史料館)

◆◆特集：九州における資史料救済活動◆◆

福岡県西方沖地震における史料救出活動

伊 藤 昭 弘

まず、断っておきたいのは、私はこれまで他地域のレスキュー活動に参加したこともないし、関連した文献・論文などを積極的に読んだこともない。そのため読者の皆さんからすれば、「今更そんなことを」と思われるようなことを書き連ねるかもしれないが、ご容赦いただきたい。また、あくまで私個人の視点であり、考えである。

二〇〇五年三月二〇日午前、福岡県西方の玄界灘を震源とする「福岡県西方沖地震」が発生した。この地震で、福岡市の玄界島を中心に、志賀島、糸島半島など、福岡市街からみて東西の地域で大きな被害がでた。

当初、私は様子見とでもいうか、「誰か活動するのであれば手伝おう」くらいにしか考えていなかったが、気づいたら、中心的立場として活動することとなった。活動の立ち上げは非常に遅く、また組織的な活動ではなかったため、なかなか情報が集まらなかった。それでも七月には、地震被害による緊急性があるもので

はなかったが、志賀島公民館に昭和三〇～四〇年代の旧志賀町役場の史料（志賀町は昭和四六年に福岡市と合併）が残されており、その整理・保存に協力することとなった。私としては、ようやく活動に実質が伴ってきた感があった。

そして一〇月、ようやく最大の被害が出た玄界島の調査を行うこととなった。玄界島への市営渡船が再開し、一般人も島に行けるようになったためである。まず、過去の玄界島文化財に関する調査をもとに、いくつかの家に手紙を出すことから始めた。そして、数軒のお宅から、返事をいただくことができた。

そのうち、戦前・戦後に島の漁業組合長を勤めたほか、島で唯一の郵便局を開設されたというお宅に、漁業組合や郵便局に関する史料が残されており、このままでは、家の取り壊しとともに廃棄される可能性があった。そこで、合計三度の調査・救出活動を行った（大学院生をはじめ、九州大学文学部日本史研究室、福岡県地域史研究所、福岡

市総合図書館の協力を得た)。また、島の初代漁業組合長を勤めたお宅では、とりあえず安全な場所に史料を避難されていたが、その史料も、我々がお預かりすることになった。救出した史料は、福岡市総合図書館に受け入れてもらった。ただ、近世史料があると思われるお宅の調査を、諸事情によりできなかったなど、恐らく救出した史料の数倍、見逃しているだろう。

今回の活動、個人的には「果たして我々の活動は歓迎されているのか」という問いを常に抱いていた。それは、地域住民や史料所蔵者だけでなく、研究者や学芸員などの、いわば「同業者」にとって、どうなのか、ということである。しかし、それは皮肉なかたちで杞憂に終わったと考えている。多くの同業者にとって、歓迎する、しない以前に、我々の活動は「他人事」であり、関心の対象外だったようである。

聞くところによれば、いくつかの史料保存機関では、史料救済の要請に対応して手一杯となり、新たな要請を断らざるをえなかったケースもあるらしい。そのような場合、もし情報を共有する手段があれば、例えば我々のグループが手伝うとか、できることがあったように思う。今後はそうしたネットワーク作りが必要だし、何よりも、災害という非常時に、難しい理屈は抜きにして、まずは動き出す意識の共有が必要だろう。

八月六日、総合図書館にて救出史料の整理を行った。残念ながら、私は所用があったために参加できなかったが、ある所蔵者が、家族総出で見学に来られた。参加者から聞いたところによれば、所蔵者御夫婦、息子さん御夫婦、ほか御親戚など五、六人程度で来訪され(玄界島の皆さんにとっては、島をでて福岡市街へ来ることは、ちょっとしたイベントである)、整理作業や史料の内容について、興味深くご覧になられたそうである。自身の不手際から発したものが大半だが、ストレスを感じることが多かった今回の活動のなかで、こうした史料所蔵者の皆さんとの交流があると、「やった甲斐があったかな」という気になる。

私は、今年四月より佐賀大学に職を得、佐賀に居を構えた。福岡での活動は現在の整理作業で終わりとし(その後は、福岡の方々の判断に委ねたい)、今後は自身の新たな「地元」佐賀で何が出来なのか、考えていきたい。

(いとう あきひろ／佐賀大学)

宮崎歴史資料ネットワーク の 誕生と今後

若山浩章

持ち込まれたアルバム

昨年9月の台風14号は本県に大きな爪あとを残した。拙宅の近所でも川の氾濫で多くの住宅が水につき、いまだにその改築工事が見受けられる。この状況は県下各地似たりよったりで、1年を迎えようとしている。

昨年の9月は各地で復興のための活動が一斉におこり、現場に多くのボランティアが入った。そうした中、1件のお宅から水損したアルバム数冊が九州保健福祉大学講師の山内氏のもとに持ち込まれた。ボランティアで入っていた学生さんが所蔵家から修復の依頼をうけたのである。山内氏(専門)は処理のため必要な真空凍結乾燥機の所在を、内藤記念館学芸員の増田豪氏に相談、増田氏は当時県総合博物館に勤務していた初木郁朗氏に問い合わせ、県の食品開発センターが持っていることを突き止めた。センターのご許可をいただき、アルバムは運ばれ処理が行われた。

このことは現在の本NWの発足の契機となった。こうした多くのアルバ

ムや古文書、書籍や記録などがこの災害で失われたのではないかという危機から、増田氏・初木氏の呼びかけで10月1日「被災地の歴史資料・文化財被害を考える会」が開催された。同会では松下正和氏(史料ネット事務局長)をお招きし、神戸などでの活動の実態を知ることができた。当日地域史の研究者など24名の参加者があったが、そこで会の発足が提案され、今年2月に正式に活動が開始され現在に至っている。



宮崎災害復興支援ネットワーク との連携

とはいうものの当初は何から手をつけていいかわからない状況が続いた。被災してからすでに時間が経過しており、多くの片づけがすみ関心も薄れていた。そこで取り掛かり

として復興支援ボランティアとの連携を主眼に置いた。今回の被災では多くのボランティアが活動したが、組織化されていなかったため、被災者が残すものと捨てるものをより分けていたのに、ボランティアがトラックで運び去るということも起こっていた。またアルバムにかかわる関心は高く、その保存の仕方にかかわる問い合わせもあちこちで出ている。

まず「みやざき災害復興支援NW」と研修会をもち、資料保存の意義や水損資料のレスキュー方法など関係者と協議を行った。まずはNW関係者にこの活動への理解を深めてもらい、ボランティアの啓発を行う必要があると考えたからである。同時にこの頃からマスコミの取材も始まり、広報・啓発活動にとっては大きなプラスとなった。



文化財担当者との連携

こうした資料に身近に接するのは博物館・資料館や自治体の文化財担当者である。1月宮崎県博物館等協議会において「博物館の地域連携事業と災害対応」と題で活動報

告と連携の依頼を行った。本県の場合、文化財担当者の配置が、地域によって差があるため、地区ごとに個別に活動の協力要請を現在でも行っている状態である。



日常の資料の保存状況の調査～今後の見通し

現在はレスキューばかりでなく、生き残っている資料保存をどう進めるかという問題も射程に入れつつある。今夏、筆者と増田氏は県内の地区有文書の保存状況をいくつか調査したが、様々な問題や課題を抱えていることが見えてきた。今後はこうした資料をどう保存し、地域の方々にどう理解をしていただくかということも話題にしたいと思っている。



(わかやま ひろあき／
宮崎歴史資料ネットワーク代表)

有償ボランティアの募集について

史料ネット運営委員会

今回、史料ネットでは、一部の史料保全活動において、試行的に「有償ボランティア」を募集することになりました。

その目的は、第一に、1995年の阪神・淡路大震災直後に救出され、神戸大学に長らく保管されている文書群の仮整理作業を進捗させること、第二に、一定の専門性が伴うボランティア業務に大学院生などが参加する際の負担を一部軽減し、救出活動などへの参加をしやすくし、活動の担い手をさらに拡大していくこと、などです。



運営委員会でも、様々な議論が交わりましたが、ひとまず上記の目的に沿って、神戸大学で預かっている出石町の水損史料の修復作業や川西市で実施する要保全史料(西野家文書)の搬出作業の二つの場でこれを試行することになりました。これらの活動に実際に参加して下さった方々や、この案内文をご覧になった皆さんに、活動の結果なども見ていただいたうえで、ご意見をお寄せいただき、こうした仕組みの有効性や是非についても、なお議論を続ける予定です。

史料ネットの会員・サポーターの皆さんや関係学会、大学などの皆さんのご意見をお待ちしています。

史料ネットの活動に平素からご協力いただき、ありがとうございます。歴史資料ネットワークは、「News Letter」を年4回発行しています(年間購読料:郵送料込み 1000 円)。

皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願い致します。また、贈呈読者の皆さまには是非とも個人会員へのご入会(年会費:個人会員 5000 円、学生・院生会員は半額)ないしサポーター(1 口 3000 円以上)としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しく願い申し上げます。

史料ネット郵便振替口座

名義 歴史資料ネットワーク 口座番号 00930-1-53945

◎●編集後記●◎

今回のニュースレターでは、九州における史料保存活動の特集しました。それぞれ地域で活動いただいている方々に寄稿いただいております。ご味読ください。また、史料ネットでは、有償ボランティア制を試行することになりました。これまでのボランティア活動体制の問題点・反省をふまえたもので、試行しているまでは運営委員会で繰り返し議論を重ねてきました。ボランティアのあり方そのものが問われる難しい問題でもあるのですが、会員の皆様にはぜひ一度ご参加いただき、ご意見等お寄せいただければ幸いです。よろしくお願いします。(S)

史料ネット NEWS LETTER No.47 2006年 12月 1日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

神戸大学文学部内 歴史資料ネットワーク

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後 1 時～ 5 時)

URL: <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/> e-mails: net@lit.kobe-u.ac.jp